

教育特集 Special feature

魅力ある学部教育

～各学部がめざす学士の力～

日時 平成20年8月7日(木)13:30～15:00 場所 本学特別会議室(本部棟2階)

経済のグローバル化が広まり、社会のニーズ、市民や学生のニーズを

カリキュラムに取り入れることが大学に求められている中で、本学では平成20年4月、

学部ごとに「教育研究上の目的」を定め、各学部の個性や特色を明確にしました。

そこで今回の座談会では、『魅力ある学部教育～各学部がめざす学士の力～』をテーマに、

各学部の取り組みについて意見交換を行いました。



■応用生物科学部
小見山 章学部長

■医学部
鈴木 康之教務厚生委員長

■工学部
若井 和憲学部長

■司会
古田 善伯理事

■教育学部
江馬 諭学部長

■地域科学部
高橋 弦学部長

各学部の養成する人材像と3つのポリシー

古田:平成22年度からの国立大学法人第2期中期目標に向け、各学部の中期計画を具体化しなければなりません。特に、「大学全入時代」の到来といわれる今、本学の卒業生は社会が求める能力を有しているのか。例えば、外国文化の理解力やコミュニケーション能力、さらに論理的な考え方やプレゼンテーション能力、または課題を探索し問題を解決する能力、社会的な責任に対する倫理観などが専門的知識と一体となって身につけていることが保証できなければ、本学の教育の質が認められないことになります。

そのためには、中央教育審議会大学分科会が示すような「高校から大学へ、大学から社会へと連なる階梯の設計」を進めなければなりません。つまり、入学者の受け入れ方針（アドミッションポリシー）、教育課程の編成（カリキュラムポリシー）、学位授与方針（ディプロマポリシー）の3つのポリシーを定め、魅力ある学士課程の構築を国立大学の使命として社会に説明していかなければならないということです。

本日は、各学部の運営責任者である皆様に、各学部が学生をどのように教育し、社会で活躍または貢献する人材として送り出すのか、そのための工夫や課題に向けた学部教育に対する思いを語っていただきたいと思います。

江馬:教育学部は、未来を担う子どもたちの教育者を養成する学部とし

て、豊かな人間性と幅広い教養、深い知性と洞察力、自ら課題を解決できる能力を備えた人材養成を目的に掲げています。この目的を実現するためには、学生をめざす教師が小学校教員なのか中学校教員なのか、あるいは幼稚園や高校の教員なのかによって、少しずつ異なった3つのポリシー（特にカリキュラムポリシー）を定める必要があると思います。例えば、小学校あるいは中学校・高等学校の国語や理科などの「免許教科」でそれぞれ目標を立て、各授業の内容を吟味しながら全体を体系化し、学習の流れが把握できるようなフローチャートを示さなければなりません。

そこで、教授一人ひとりが講義一つ一つに目標を定め、それを確認するためのチェックリスト（能力表やマトリックス）を作成します。そして1年から4年まで、それぞれ学習到達度をチェックする体制を整えます。また、教授陣の能力開発を組織的に進めながら、教員と学生の両者によるチェック機能が学生の勉学意欲を喚起し、豊かな人間性を備えた教育者を育てることにつながるようにしていきたいと考えています。



古田:教育学部は、学生の進路を踏まえ、細かい区分で教育の方針を設定していくということですが、他の学部では3つのポリシーを明確にする場合、学部単位もしくはもう少し細分化した学科単位で考えるのでしょうか？

高橋:地域科学部は、人文科学・社会科学および自然科学を総合的に理解し、地域が持つ多様性を広く探究する能力、そして的確に判断し地域社会に貢献する人材を養成したいと思っています。

本学部は平成7年に創設した新構想学部ですから、例えば、ディシプリン（学問分野）が確立した経済学と新しい分野の福祉研究を組み合わせ、社会福祉問題に取り組む力を授けるなど工夫を凝らした授業を展開しています。この工夫したカリキュラムのポリシーをもっと具体化していく必要があるわけですが、現在は、文学と環境、法律と生命科学などさまざまな融合領域のカリキュラムが、課題探求能力や地域社会に貢献する資質にどのような関連性があるのかを、十分学生に示しきれていないことが反省点です。今後は、学習意欲を高めるためにも授業の到達目標として示していくとともに、受験希望者に対してもわかりやすく説明し、目的を持った学生が入学できるようにしなければと思っています。

古田:学外の方たちから、地域科学部という名称からは何を学びどのような分野で活躍できるのかが見えにくいという意見をいただいておりますが、文理融合分野のカリキュラムが

学生の能力向上にどのように関係するのかを示すことで、自分の将来像を描くことにつながります。職業観で言えば、地方の再生や活性化に貢献する職業などですね。

小見山:応用生物科学部は、食品製造管理から薬品とサプリメントの開発、さらには環境保全のための草地や森林、野生動物またはペットの健康管理から人との共通感染症まで、非常に幅広い領域をカバーしています。そして、動植物の生産・保全管理などは地域と環境を維持するために欠かせない学問です。学部のカリキュラム構成として、低学年の「全学共通教育」、学部に必要な「教養基礎」、高学年の「専門基礎」、最後に「専門科目」を組み合わせた4教育群によるプログラムをつくり、食品生命科学・生産環境科学と獣医師養成（6年間）の分野で、『学士力』を備えた学生が、食の安全・安心や食料生産、CO₂の削減や野生動物の保護などの環境問題に積極的に貢献できる人材となるようにしたいと考えています。

古田:『学士力』は、専門的な学識というベースがあって、人間的な教養や倫理観など温かみのある判断力を備えることだと思います。各学部は独自の『学士力』をめざしつつ、岐阜大学の特長としての全学共通教育の位置づけを明確にし、学生にわかりやすく説明していかなければなりません。そして、そのような力をもった「21世紀型市民」が社会を変えることになるのでしょうか。

鈴木:医学部は、医師および看護師などの医療人養成が目標で、教育目標の焦点は比較的シンプルです。古くから、医療人に必要な知識・技術・態度の側面から目標が定められ、全国共通の「コアカリキュラム」も制定されています。「コアカリキュラム」をベースにしつつも、各医学部が独自の目標とカリキュラムを構築することが求められています。本学医学部は「人間・自然・社会に対する豊かな感性と洞察力を持って、世界と地域の医学・医療の発展に貢献できる医療人および医学研究者の養成」を目的としています。

現在の医師国家試験は知識の評価に重点が置かれており、臨床能力をいかに評価するかが問われています。また医療界でも国際化が進んでおり、国際的なスタンダードを教育に取り入れる必要も出てきています。本学では他大学に先駆けて問題解決能力の育成（テューリアル教育）や診療能力の育成（クリニカル・クラークシップ）に力を入れ、教育を改善してきました。今後は、FDの充実を進めながら、世界に通用する医師の養成を進めることになると思っています。

古田:医学部や応用生物科学部の獣医学課程、それに教育学部は卒業と同時に国家試験などによって免許が得られるわけですから、入学生の目的ははっきりしていてカリキュラムも体系的に整理されていますが、これからは専門的な知識や技術のみを教育してはダメだということですね。では、ものづくり教育を柱とする工学部はいかがでしょう？



若井:工学部が有する9つの学科は、高度に専門化されつつある工学の範囲をそれぞれ最先端技術として修得しやすく分類しています。そこで、社会・自然・文化などに対する見識・感性と倫理観を持ち、専門的に特化した職業能力を習得したうえで、人間性豊かで創造性に富んだ技術者を養成する目的を定めました。

一方では、国際的に質の保証が求められている中で、社会基盤工学科の教育課程は「日本技術者教育認定機構」（JABEE）の認定を受けており、国家資格である「技術士」の第一次試験を免除され、卒業後に必要な経験を積んだ後、第2次試験を経て世界に通用する「技術士」となることができます。このJABEEの認定教育課程を得ることを目標に掲げ、各学科はカリキュラムの検討を進め、教養教育・工学基礎・専門基礎・専門科目・総合科目という5つの科目群を体系的に整理し、『学士力』とリンクした教育課程の構築をめざしています。ただし、学会によってはJABEE認定プロセスの煩雑などが理由で学会に関連する学科の認定を必ずしも推奨しなくなっており、そういう学科には「技術士」の1次試験に対応した教育プログラムをつくっていきます。

大学の先生も勉強しよう FD(指導能力開発)

古田:各学部とも教育課程の編成(カリキュラムポリシー)に取り組み、社会に貢献できる人材となるための『学士力』とは何かを定義づけ、それぞれの授業を体系的に構築しようとしていることがわかりました。

次に、カリキュラムの実質化と言いましようか、授業を受け持つ教授陣の質の向上が必要になりますね。教員の指導能力開発「FD」(ファカルティ・ディベロップメント)については本学全体で取り組みたいと思っています。特に「教員免許」を必要としない大学教員には、学生指導または授業方法に関して、優秀な教授の授業を見学するなどの研修の機会または自己研鑽が必要です。このような取り組みを実施している大学もありますので、これらを参考にしつつ、FDの専門家を養成するなど組織的な仕組みをつくっていきたくと思っています。

では続いて、シラバスについてお聞かせください。シラバスは、授業を担当する教授がその授業の内容や成績評価方法を具体的に示し、学生が履修する授業を決める際の指標とするものですが、実際にシラバスをつくるときに注意している点はありますか？



若井:シラバスの目的にはもうひとつあります。個々の授業が相互に関連づけられていることを示すことです。そのためには授業内容を調整する努力が必要ですが、現在は相互連携があまりうまくいっているとは思えません。そこで、JABEEの方式に従って卒業までの到達目標を定め、そこに至るまでの各科目の役割を明確にすることで質の高い教育を提供できるよう進めています。学生が目的を持って授業を選択し、履修するためにシラバスを活用するよう指導したいですね。もちろん、シラバスを作成する教員としては、体系的なカリキュラムを不断に見直しつつ相互連携を図ります。

江馬:現在、教育学部は大部分が必須科目ですから、学生は、シラバスによって履修計画を工夫する余地は少ないといえます。しかし、旺盛な学習意欲をかきたてるため、興味深い授業をシラバスに示すことで、卒業に必要な単位以外を学生が積極的に履修したくなるようにすることも大事でしょうね。

また今後は、学生の目標を踏まえた選択科目を増やすことも考えていきます。具体的には、小学校教員あるいは中学校教員を目標として選択できるような、メリハリのあるカリキュラムの編成を検討することです。

鈴木:医学部も必須科目がほとんどですね。医師や看護師の国家試験の出題基準が細かに定められていますから、大幅な自由化は難しいでしょうが、選択科目の導入も少しずつ

つ広まりつつあります。

高橋:地域科学部では、教師や医師または看護師のような資格取得のための授業はありませんから、シラバスによって『学士力』を獲得するための授業到達目標を示すことが大事です。文系の授業では到達目標を掲げることは大変難しい面もありますが、学生の視点から到達後の満足感を獲得できる目標みたいなものは示しています。それが学習意欲につながるのではないのでしょうか。

大学では、「講義」と「授業」を使い分けます

小見山:大学では「講義」と「授業」を使い分ける必要があると感じています。「講義」では教授のフィロソフィーが必要です。つまり、自分が行った研究から得られた技術や知識、すなわち義を講ずるのが講義です。一方、過去の研究者が発明・発見した事実を説明して業を授けるのが授業です。このふたつをカリキュラム上でいかに取り交ぜるかが大事です。その配分が『学士力』につながると思います。

学生には、目の前にいる科学者が世界でひとつの講義を行い、それに対する疑問をぶつけることができる喜びを感じてほしいですね。また、そこから新たな研究テーマが生まれ、のめり込むようなことも期待しています。注意すべきは、講義ばかりですとカルチャースクールになるし、授業ばかりだと専門学校になってしまうという点です。学生にとって、講義を楽しむためには授業の努力が必要なのです。

講義と授業がバランスよく配置され、相互の関連や到達目標をシラバスに明示したいものですね。両方がないとユニバーシティにならないと思います。



古田:トータルなプログラムが『学士力』につながるということですね。

高橋:『学士力』は、どんな専門、どんな学部を出たかにかかわらず共通して持っていなければならない力、例えばコミュニケーション能力は共通して持っていなければならない力です。それは、教養教育と専門教育の連続性の中で培われると思うのですが…。

古田:そうですね。独立した教養教育では、学部の特性を活かした教育編成が難しくなります。しかし、一方では教養教育が各学部でバラバラになる可能性もありますね。これが今後の大きな課題でもあります。

小見山:広い意味で社会人リテラシーのような教科、補習教育(リメディアル)はそれぞれ学部生の特性があって、全学部を横並びにはできないのではないのでしょうか。

高等学校と大学の連携

古田:つまり、初年度の教育が大事ということですね。アドミッションポリシーに定める要件を高校と連携して理解いただくということでしょうか。

例えば、ある科目が「できる」「できない」ではなく、「やっていない」のは困りますね。

小見山:高校で「やっていない」科目については、時間を集中してリメディアルしなければ専門教育をすることはできません。

高橋:社会科離れ・理科離れと言われていますが、これは知識が不足しているというより、青年が持っている自然現象や社会現象に対する当然の関心自体が希薄になっていることだと思います。受験科目にない教科でも知的好奇心を持ってほしいものです。このような状態に対する危機感が「21世紀型市民」という言葉で示されたのではないのでしょうか。

古田:そうですね。「21世紀型市民」とは「専攻分野についての専門性を有するだけではなく、幅広い教養を身につけ、高い公共性・倫理性を保持しつつ、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは社会を改善していく資質を有する人材」と中央教育審議会は言っていますから、現代のさまざまな現象に関心がなくては、大学に入学すること自体が目的化する恐れがあります。

例えば、理科に対する興味・好奇心を持つような実験を子どものうちに

体験することもひとつの工夫です。教育学部でも、学生の実験時間が少なくなっています。現職教師に対する実験講習会を開くなどの取り組みが必要ですね。また、英語教育は各学部の到達目標が異なります。大学全体で「語学センター」のような組織を構築し、興味ある学生が自らの意思で語学力を向上できるプログラムをつくることも有効かもしれません。

そして、学部卒業者には学士という「学位」が授けられる、その学位の質を国際的に保証するポリシーが最後にあるわけです。



古田:本日は、各学部の教育研究目的を幹として、学生をどのような社会人として送り出すのか、そのための教育課程をどのように構築していくのかを中心に語っていただきました。時間の都合上、具体的な内容にまで踏み込めませんでした。各学部が大きく変わろうとしていることはわかりました。

この座談会の冒頭に述べましたとおり、岐阜大学の新たな中期目標・計画の中に具体的な措置を定め、本学の卒業生が「21世紀型市民」の規範となれば幸いです。本日はありがとうございました。